

マイノリティ・コミュニティにおける社会運動の諸相

— 京都・東九条を事例として —

Aspects of Social Movement in a Minority Community as Presented by an Example of Higashi-Kujyo

高 誠晩 (京都大学大学院文学研究科 博士後期課程)

【メンバー】

李 洪 章 (京都大学大学院文学研究科 博士後期課程 / 日本学術振興会 特別研究員)

李 定 垠 (ソウル大学女性研究所 研究員)

山本 崇記 (立命館大学衣笠総合研究機構 ポストドクトラルフェロー)

山口 健一 (京都大学大学院文学研究科グローバル COE 研究員)

宇都宮めぐみ (大阪大学大学院文学研究科 博士後期課程 / 日本学術振興会 特別研究員)

山根 実紀 (京都大学大学院教育学研究科 修士課程)

瀬戸・徐・映里奈 (京都大学大学院農学研究科 修士課程)

小松原織香 (大阪大学大学院人間科学研究科 修士課程)

【ねらいと目的】

戦前から在日朝鮮人が集住し、被差別部落とも隣接している東九条地域を事例とし、マイノリティ集団の社会運動を通して形成・再編される親密圏と公共圏の在り様を分析した。マイノリティによる社会運動は、集団内部における親密的な関係性を通して肯定的なアイデンティティ形成を可能にするが、それが即時に社会運動として公共性を帯びるわけではない。むしろ、民族・階級・ジェンダーなどの複合的な差別構造のなかで、各々の親密圏は衝突し、閉鎖的な圏域を再生産する可能性があるだろう。この点、絶えず当事者運動が登場する東九条という地域は、開放的な親密圏を通じた公共圏のポジティブな再編成の可能性をうかがわせるものであった。

【活動の記録】

2009年12月22日～23日

京都大学—ソウル大学学術交流ワークショップ「コリアン・ディアスポラの親密圏と公共圏の変容」において京都・東九条地域部会を設置し、山根実紀が「日本人—朝鮮人、教師—生徒をめぐる権力関係を克服する識字実践—京都・東九条オモニハッキョを事例として」、山本崇記が「定着と流動の臨界としての『不法占拠地域』における在日朝鮮人の住民運動に関する分析—京都市を事例に」をテーマとしてそれぞれ報告。

2009年6月～8月 東九条オモニハッキョ関係者へのインタビューと資料収集 (山根)

2009年8月～12月 東九条 CAN フォーラム学習会での参与観察 (李)

【成果の概要】

1. 山本は、東松ノ木町の形成過程と現状に関する調査を行った。松ノ木町「40番地」は「不法占拠地域」としてその非合法性のうえに立ちつつも、在日朝鮮人、被差別部落民、下層労働者といった様々な属性を持つものたちの間に住民性を形成することに成功し、コミュニティの特性を維持したまま住宅の建設を実現するという成果を残した。「不法占拠地域」とされた空間で形成されるアイデンティティには、住民であることと在日であることが、入れ子になるかたちで表出し、住民組織はその点に立脚しながら、戦略的に重点をシフトしていることが明らかになった。
2. 山口は、「東九条マダン」における公共性について考察した。「東九条マダン」は、在日朝鮮人の民族文化の表象を第一義的な要素としつつも、在日朝鮮人や被差別部落民、あるいは障害者といった社会的弱者に関する歴史と現状を可視化することを副次的だが不可欠な要素として含んでいた。そのような「東九条マダン」は、社会的弱者に関する歴史と現状を、楽しい民族まつりに参加する日本社会の人びとに呈示することにより〈自発的に気付かせる〉という戦略を有していた。
3. 山根は、1978年に開設された「九条オモニ学校」を事例として、植民地時代、民族差別や女性差別など複合的差別に根付いた不就学・非識字の経験を抱える在日朝鮮人女性に向き合おうとする教師たちの実践を通して、自明とされてきた「学校」や「識字」に加えて、日本人－朝鮮人、教師－生徒、ジェンダー間の権力関係をいかに乗り越えるかという課題に迫った。

李と瀬戸・徐は、東九条 CAN フォーラムによる「地域」のまちづくりに着目した多文化共生理念の可能性についての考察を行った。従来の「まちづくり」は、住民の健康や安全を確保するための、目前に迫った課題であった。しかし、一定程度東九条の住環境問題が改善された状況下で、その活動に新たな役割が付与されようとしていた。CAN フォーラムは、東九条住民たちに「東九条型多文化共生」の具体像を提示する「東九条マダン」を基礎とすることで、高い戦略性と実践性を持った運動として結実していく可能性をうかがわせるものであった。

